

平成25年度 第2回山梨県考古博物館協議会議事録

1 日 時 平成25年11月19日(火) 午前10時～

2 場 所 考古博物館(風土記の丘研修センター)

3 出席者 (敬称略)

(委員) 堀内邦満、市川清、小川はるみ、大隅清陽、椎名慎太郎、谷口一夫、
齊藤洋子、今福政江、杉野美幸、吉岡剛、堀之内睦男、深沢信吾 12名
(事務局) 望月館長、福島次長、米田学芸課長、総務課員2名、学芸課員1名
(教育庁) 田中学術文化財課長、学術文化財課員1名

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 会長あいさつ
- (3) 議事
- (4) その他
- (5) 閉会

5 会議に付した事案の件名

- (1) 平成25年度考古博物館経過事業について
- (2) 平成25年度考古博物館予定事業について
- (3) 考古博物館基本理念について
- (4) その他

6 議事の概要

○ 平成25年度経過事業・予定事業に関する質疑等

(委員)

学校関係利用について、県外の学校の周知方法はどのように行っているのか。特に県外の小学校の利用が多いが、これは毎年異なる学校が来ているのか。

(事務局)

県外の小学校はほぼリピーター化していて、新規の学校は数校程度。県外学校への周知方法については、毎年、教育委員会を訪問することなどにより広報を行っている。

最近、学校では出控えの傾向があり、県外も県内も利用数が落ちている状況にある。

○ 考古博物館基本理念に関する質疑等

(委員)

5つの方向性についてなるほどと思った部分もあるが、何か足りないなあという気がする。

私たちは近代文明の行き詰まりというところにぶつかっている。産業革命以来、人間は現代文化を発展してきたが、その中で環境が破壊され、公害が起こり、人々の心はすさんできている。私が考古学に向かうに当たって考えるのは、謙虚に学ぶということ。

例えば、このたび国史跡に指定された梅の木遺跡を考えてみると、あそこに500年に渡って住み続けて、結果的に180軒ほどの環状集落ができて、そこから水場へ出る道があって、水場に作業場がある。環境を壊さずに、環境と調和しながら住んでいたからこそ、ああいう遺跡ができた。

古代人が環境を大切にしながら生きて、そういう心を育てるという部分が、ここには少し足りないような気がする。私たちは学校教育などの中で、環境と調和しながら生きてきた人々の心を育てるというような部分が、どこかに入れられないものかなあと思う。

(委員)

梅の木遺跡の現場に立ってみると、何もないけれども非常に心の豊かさを感じる。まさに今言われたことを現地に行くと感じる。

県内の様々な遺跡を見ると、集落の後ろに特徴的な山を持っているところが多い。そうすると、縄文人の人々がいろいろと歩き回ったとしても、恐らく自分の特徴的な山が見える範囲までは歩けけれども、見えなくなると戻ってくるのではないかといつも思う。そうした自然の環境を感じ取った生活感を垣間見ることができる。

(委員)

県民目線から見ると少し高尚かなというイメージがあるので、少し掘り下げて頂きたいというのがある。

学校利用については素晴らしいので継続して頂きたいと思うが、市町村の教育委員会に対してもっと働きかけをして頂きたい。地域の郷土資料館もいいものを持っているので、考古博物館がハブ機能をもって、市町村との連携を図って頂きたい。例えば、ミニ企画展の巡回などもいいのではないか。甲府市などは、新しい庁舎のエントランスで展示などを始めているが、常時展示する場所は持っていない。

ポンチ絵の「連携」のところに、市町村の社会教育課や社会教育施設との連携も加えて頂けるとありがたい。

(委員)

「3 郷土を再発見できる」については、前回会議資料での「新しさを再発見できる」から変更されていたが、この文言の方がよりいいかなと思う。文言にこだわって言うと、「4」については、「意欲をかき立てる」のか「意欲をかき立てられる」のか、どちらかなということが気になった。この辺はよく検討されてのことだと思うが。

短い言葉の中に思いをたくさん込めていくというのは大変なことだと思うが、下の説明の中に書き加えるとかする中で、キャッチフレーズを作っていたらいいと感じた。

確かに県内の小中学校の利用がなかなか進まないが、社会科研究会などで活用を呼びかけてはいる。足の問題や連れてくるのにお金がかかったりということがあるのだと思う。

(委員)

これをもとに将来的には中期計画を立てるとか、数値目標を設定するということになるのか。

(事務局)

今の段階ではそこまでは考えていないが、いずれ求められる時代が来ると思う。その時にはこの方向性をベースに考えることになると思う。

(委員)

大学の立場でいうと、あまりうっかりしたものを作るとあとで手足を縛られてしまって自由に動けなくなるということもある。ただ、そういうものを求められた時にさっと出せるように日頃から準備しておくことも大事。本日拝見したところでは、博物館として当たり前のところから、やらなければならないことをコツコツやっていると思うが、それがうまくはまるようになってきていると思う。例えば、これをもとに5年間の行動計画を立てなさいとなった時には、非常に作りやすい文面にはなっていると思う。

ただ、ちょっと優等生的というか、もうちょっとインパクトのある、この博物館はこういう博物館なんだという1つキャッチがあってもいい気もする。数値化できないような大きな目標が掲げてあるということも、抛り所になってくると思う。今これというものが思いつくわけではないが。

(委員)

先ほどの「意欲をかき立てる」のか「意欲をかき立てられる」のかについては、主語が博物館にあるのか、来館者にあるのかということだが、これはどちらのスタンスなのか。

別の委員からもあまり詳しく書いてしまうと、逆に博物館活動の身動きが取れないようなことになるとの話があったが、博物館活動そのものもフリーに、その時その時の時代に合った形で思い切り展開していくという発想が必要だと思う。敷居をまたがなければ入れない博物館なのか、敷居がない、いつでも入れる博物館なのかということも非常に重要なこと。国立博物館などは、本当に敷居をまたいで入っていく感じで、それに比べると考古博物館は敷居がない博物館だと思う。来館者が自然に集まってくるような雰囲気のある博物館であることも必要だと思う。

そうすると、「意欲をかき立てる」といっても、意欲をかき立てられるかどうかは、来館者それぞれの感じ方によって全く違うはず。毎年協議会が開催される秋の時期などは、周辺の紅葉が見事でそれを目当てにやって来る人たちも多い。そういうことも含めて情報発信することによって、心が洗われる人もいるだろうし、個人的に非常に意欲をかき立てられる人もいるということ。

表現の仕方、書き方をどうするかは少し工夫が必要かなという気はする。

(委員)

先ほど考古博物館のあるこの土地、場所が大事だとの話があったが、山梨県の中心の甲府ばかりに目を向けるのではなく、南の方に目を向けることも大事。

具体的な話になるが、場所が大事なのでこの場所を動かすことはできないし、紅葉1つとってもこの場所の素晴らしさは非常にいいと思うので、高齢者などの弱者がもう少し楽に来られるようにできないか。県立博物館などは、乗客がいろいろがいが定期バスが待っている。考古博物館だけでなく、甲府市全体の中で利用しやすい循環バスなどがなく、不便な場所ということになって、敷居の高さになってしまうのではないかと。

もう1つは、高齢者にとっては駐車場から館の入口までの距離が遠く、舗装に石が入っているので、歩いてもつまづきやすいし、車椅子だととても大変。また、高齢者の方が車で入口のなるべく近くまで来られるようにして頂くなど、弱者にもやさしい博物館になればいいと思う。

(委員)

ポンチ絵の右の埋蔵文化財センターとの連携の中で「資料普及活動」とあるが、市町村でいろいろな遺跡が発掘されてもそれらがかなり眠ったままになっていて、地域の人たちが知らないものもある。その辺を掘り起こして地域の再発見ということで、県内社会教育施設への展示支援ということができないか。

県内には条例設置の公民館が512あり、その他に類似施設もたくさんある。そういった施設で、考古博物館でバックアップしてもらって、市町村で発掘したいろいろな資料を展示することができないか。

(委員)

いろいろとご意見があったが、基本理念として大きな項目を新たに作るということではなく、各項目の文言の中に含めて考えられるということであればそれはそれでいいと思うので、今回のご意見を踏まえて事務局で検討して頂きたいと思う。

(委員)

先の委員さんの意見にもあったが、「古代の人に謙虚に学ぶ」ということが一番大切なのだと思う。それをどこに入れるかは事務局に任せることにして、とにかくこの大きな自然の中でたくさんの人に来て頂くということと、現在の遺跡や遺物に古代の人の考え方を学んで、それをまた今に伝え、そして未来に繋げていくことが必要だということ、一番強調してもらいたい。

バス路線の話だが、これは我々の長い間の課題。協議会を開催するたびに課題だと言いながら全く前に進んでいないので、そろそろ何か発信していかなければならないと思う。県立美術館は土日に定期バスが出ているようだが、私が前から考えているのは、県立博物館、考古博物館、県立美術館の3館を繋ぐような路線を、平日は午前と午後の2往復、土日はさらに増やすようなことができないかということ。協議会としても、行政なり、交通機関に働きかけをしてみることが1つのステップになると思う。インカ帝国展の時も臨時バスを出したと聞いているが、一時的にバスを出しても考古博物館にはバスはないと思っている方が多いので、あくまでも定期的に走らせることが必要だと思う。

今回の特別展を何回か見学させてもらったが、副題に「いざとなったら縄文食」とあったので、災害の時に参考になるようなことがあるのかなと思って見せてもらった。いろいろ企画されていたが、例えばどこかのコーナーで、ドングリのアク抜きや食べ方の説明、さらにはどんな味がするかを体験できるドングリクッキーの試食コーナーなどが、毎日少しでもいいからあったらもっとおもしろかったかなと思った。

(委員)

足の問題についてはこの協議会が始まって以来の課題。実際に今走っているバスに乗っている人が少なく、利用者が少ないから頻繁に走らせることができず、頻繁に走っていないから利用者が少なくなるという悪循環になっている。

基本理念の話に戻るが、「古代人(あるいは縄文人)に謙虚に学ぶ」という姿勢は大事で、ぜひ入れてほしい。やはり古代人から学ぶことは非常に多いわけで、まずそれを大きく打ち出すのもおもしろい。

(委員)

来館される親御さんから言われるのは、その場ですぐに学べるのが大事で、出しっぱなしの状態の中で興味を持ったらたまにそれを見してみる、分かる、ということが積み重なって学びが次のステップに進んでいくということ。見て分かりやすい展示ということが非常に大事なので、「分かりやすさ」ということをポイントにして頂ければと思う。

(委員)

いろいろな意見が出て充実した議論になったと思う。目指すべき方向性の「1」がまず全体

目標のようなもので、「2」は楽しみながら、「3」は地域の再発見、「4」は博物館が持っている研究者支援機能というか、より深く学ぶ目的でやってきた人にもきちんと対応できる準備ができているということ。「5」の中に地域連携のような内容が加わってもいいのかなという気がして、「適切な環境で保管し、県内の様々な機関と共有するとともに後世に伝え」というような形で入れたら今日の議論も活きると思う。

冒頭で話をしたのは、「1」の「知識を深め」と「知性をはぐくむ」が少しダブっていて、それだけでいいのかという気がしたから。例えば、「生涯にわたり古代史や考古学に関する知識を深め、古代人の生き方に謙虚に学ぶことができる考古博物館」というような表現にしたかどうか。細かい表現は事務局にお任せするが、さきほどからこちらの席から美しい紅葉が見えていて、非常にいい環境、自然の中で山に抱かれるようにある考古博物館なので、こういう中で古代人が生きていたんだということを謙虚に学べるという意味で、提案させて頂いた。

(委員)

各委員からご意見を頂いたわけだが、この理念をまとめるのにどのくらい時間があるのか。

(事務局)

具体的なリミットがあるわけではないが、整理された段階でホームページ等に掲載していく予定でいる。様々なご意見を頂いたが、大きな項目は活かしつつ、その説明の中でもう少しところを入れていくということで対応させて頂ければと思う。

今年度はもう協議会を開催する機会はないので、今回のご意見を踏まえて文言等を修正したものを文書でお送りするので、それをご確認頂いて進めさせて頂ければと思うが、それによろしいか。

(委員)

異議なし。

(委員)

それでは、事務局から本日の議論を踏まえて修正したものがお手元に届くので、それをご確認頂くという段取りを経て、最終的に決定とさせて頂きたいと思う。

－ 以上 －